

## 憎みても余りある原爆

糸沢 定雄（当時19歳）  
釧路市



私は陸軍船舶特別幹部候補生として、爆心地から10kmほど離れた広島湾の江田島で特攻訓練を受けていた。

8月6日、当日は朝から暑く、私たちは上半身裸になって兵舎で上官から訓練のための講話を聞いていた。突然暗い室内がマグネシウムでも焚いたように隅々まで明るく照らし出され、近くで大爆発があったような大音響と衝撃を感じた。私たちは急いで防空壕に退避したが、振り返って広島市の方を見ると、上空に巨大なキノコ雲がムクムクと上昇していくのを見て驚いた。私たちはそれが世界最初の原爆投下とはつゆ知らず、広島のがスタンクが事故で大爆発したのではないかと信じていた。

翌7日、上官から救護隊派遣の話があり、私は志願して似島へ行った。似島は字品港と江田島の間であり、軍の病院があったところである。間もなく何隻もの機帆船が被災者を載せて岸壁に近づいてきた。中から呻き声、泣き声、叫び声が入り混じって聞こえてくる。不思議に思ったが、船の中を見て私たち救護隊は一瞬後ずさりした。そこに積まれていたのは人間であって人間でない姿の人々だった。髪が抜け、服もほとんど焼けちぎれ、全身の皮膚が剥けて、顔の途中に引っかかったり、あごの下にぶら下がったり、伸ばした手の先には皮膚がなく皮が垂れ下がっていた。顔も大きく腫れあがり、目と口はかろうじてわかるものの人間の顔とも思えなかった。そして「兵隊さーん、痛いよう、助けてえ、水を……」と叫ぶのである。

地獄の底をさ迷っているような姿に、恐怖と驚きですぐには手が出せなかった。比較的軽症の人を抱き上げ、何度も病院に運んだ。朝鮮人の搬入は後回しになってしまった。病院では患者の名前を聞いて荷札に書きとめ、患者の腰に結わえつけた。意識のない人や話の出来ない人は、

男女の区別、おおよその年齢を書いて結わえつけた。

応援が来るまで一人で50人もの重体患者を受け持った。外から戻ると、歩くことはおろか動くことすらもできないはずの患者が痛みと苦しみ、のたうちまわってずっと離れた場所まで転がって行って死んでいた。何とかしてあげたくても何もしてあげられない。瀕死の子どもは、せめて母親がわりにと息を引き取るまで抱いてやることしかできなかった。

朝になると患者の数は半分くらいになった。たくさんの人が苦しみながら死んでいったのである。それらの人々は荷札をはずし、髪の毛を切り取って一緒に保管した。死体は1m×5m、80cmくらいの深さの退避壕に30人くらいずつ入れ、土をかぶせて埋めた。死体を埋めるとその分新しい怪我人がまた運ばれてきた。

似島に来てから1週間後、今度は広島市内の後片付けを命じられた。広島市の市街地は一面瓦礫と化して崩れ落ち、眺めを遮る建物はほとんどなかった。街中どこへ行っても死体があった。被爆の傷みに加え、1週間真夏のかんかん照りの中に放置されて腐乱し、蠅、蛆がたかり、目をおおうばかりであった。広島市内を幾筋も流れていた川にはいくつもの死体が流れており、棒で引き上げようとするたびにブヨブヨと死体が溶け出す有様であった。鼻をつく異臭と崩れていく死体の惨状に、この世の地獄を見る思いで逃げ回っていた。

8月15日敗戦。江田島に戻ると鼻血や血便を出して死ぬ同年兵が現われた。原爆症である。私は8月20日に特攻隊として沖縄に向けて出撃の予定だったが、かろうじて戦死をまぬかれた。死はまぬかれたものの、広島で地獄図絵を見てきた。あの日、私の手に抱かれて逝った子どもたちの温もり、泣き叫ぶ被爆者の声、ずるりと剥ける被爆者の皮膚の感触、こびりついた死臭、目鼻を失った顔。それらは70年たっても私の脳裏から消し去ることはできない。加えて私自身も40歳を過ぎて心拍が停止する病気を発症、69年からペースメーカーを使わざるを得なくなっている。

原爆は民間人までを無差別に大量に殺戮する。そして生き残った者には放射線の障害を一生背負わせる。「被爆者」は私たちだけにしてほしい。そして世界からこの非人道的な核兵器を絶滅させなければならない。